中年期の知的障害のある人の自己認識の変化
―生涯発達的観点からみて―

杉田穏子

〔キーワード〕生涯発達，中年期，知的障害のある人，知的障害の自己認識，アイデンティティの再体制化

〈要　　約〉

生涯発達的観点から見ると，人は，中年期に，これまでのアイデンティティに揺らぎを感じ，「自分とは何者か」「他者の役にたっているのか」を問い直し，アイデンティティを再体制化する課題に直面するとされている。本論文では，中年期の知的障害のある女性２名の語りから，学齢期に知的障害を認識していたが，その後社会とのかかわりのなかで，仲間の相談役・指導者として役にたっているという自己肯定感を積み重ね，それに伴って「障害者」という自分の枠組みに揺らぎを感じ,「障害を乗り越えた自分」「障害があるかどうか分からない自分」という新しい障害観，自己認識を獲得していたことを示した。

１．はじめに：生涯発達的観点とは

これまでは，人間の知的能力は 18 歳～ 20 歳をピークにゆるやかに下降すると言われ（柏木 2013,26），乳児期から青年・成人期に達するまでの発達の過程を追う発達観が重視されてきた。しかし，近年，そのような考え方に対して中・老年期も含めた生涯をみていく生涯発達という考え方が重視されるようになってきた。やまだ（1995,65）によると，これまでの観点は「成長モデル」と呼ぶべきもので，「『子どもがおとなになる』までの発達過程，特に人生の初期に急速に進展する成長期の発達に過大な焦点があてられ，認知発達においては成人の知的能力が完成体であるとされた。…そこでは暗黙のうちに，健常な発達は青年期から成人期で完成し，その後は衰退や下降の過程だとみなされてきた」とされる。そのため生涯発達的観点では,「従来の発達心理学の根本的な見直しが必要になる」（やまだ 1995,57）としている。

岡本（2002, ⅱ）は, 生涯発達的観点において,「知能, 言語, 認知などの諸機能, パーソナリティ, 対人関係などの一側面，あるいは職業，家族といった一領域からとらえるのではなく，一人の人間のあり様をトータルに見る視点が不可欠である」として，エリクソンのアイデンティティ論に注目し，その中でもこれまで焦点のあててこられなかった成人期・老年期の研究を重視している。さらに岡本（2002,45-8）は，エリクソンのアイデンティティ論を発展させたフランツら（Franz,C.E.& White,K.M.）やヨセルソン（Josselson,R.L.）の考え方を紹介するなかで，これまでの西欧の男性的自我の発達を念頭においた，自律性を発達の指標とする従来の人間発達観のみでなく，人とのつながりや相互協調性，配慮やケアといった関係性の視点から心の発達

をとらえようとする発達観に注目する必要性について述べている。そのため成人期のアイデンティティの発達には「個としてのアイデンティティ」の確立のみでなく「関係性にもとづくアイデンティティ」の発達の２つの軸，および両者のバランスのとれた統合が重要であるとする。つまり，第１の軸の個としてのアイデンティティの中心的テーマ「自分は何者であるか」だけでなく，さらにもうひとつの軸の関係性にもとづくアイデンティティの中心的テーマ「自分は他者の役にたつのか」が重要であるとしている。特に中年期は，これまで安定していたアイデンティティが揺らぎ，自分の生き方の見直しが行われ，その後，軌道修正により，再び主体的に関与できる生き方を獲得するというアイデンティティの揺らぎと再体制化のプロセスであるとしている（岡本 2002,65-6）。

２．本論文の目的

ところで，知的障害のある人についても一般的に，その知的能力は，障害のない人たちと同様，20 歳ごろをピークに，その後横ばい状態から，緩やかに下降するといわれている（小池，北島 2001,11）。現在まで，知的障害のある人の研究は，就学前から学童期を対象にした研究には多くの蓄積があるものの，成人期以降，特に中年期・老年期を対象にした研究はほとんどなされていない。しかし，知的障害のある人についても，いわゆる IQ に代表されるような知的能力尺度でのみ測るのではなく，一人の人間のあり様をトータルにみる生涯発達的観点からその変化をとらえていく必要があるだろう。

障害のある人の発達を生涯発達的観点からとらえた研究にはすでに田垣（2007）のものがある。田垣（2007,2-3）は，中途障害者（肢体不自由者）の心理社会的問題を考えるうえで重要なのは，事故や発作などでそれまでの日常を突然失った「喪失の意義」を考えることであるとして彼らのライフストーリーから，彼ら自身が見いだす障害の意味の生涯発達的変化を分析している。

しかしながら，知的障害のある人の多くは生来型であり，「喪失の意義」を論ずることは難しい。このため，本論文では岡本らの生涯発達論の考えをもとに中年期の知的障害のある人の発達をとらえてみたい。先述したように岡本（2002,45-8）は，成人期のアイデンティティの発達の軸として，個としてのアイデンティティの中心的テーマ「自分は何者であるか」，さらにもうひとつは関係性にもとづくアイデンティティの中心的テーマ「自分は他者の役にたつのか」をあげている。そして，中年期は，アイデンティティの揺らぎと再体制化のプロセスであるとしている。

知的障害のある人が，自分の障害をどう認識しているのか，例えば一旦獲得された障害の認識が揺らぎ，新たな認識に変化するプロセスを追うことは，「自分は何者であるか」のテーマの大きな部分を追うことになると思われる。また彼らのライフストーリーから，彼らが職員や仲間との関係性の中で自分の役割をどのように見いだしているかの変化のプロセスを追うことは，「自分は他者の役にたつのか」のテーマの大きな部分を追うことになると思われる。

本論文では，障害の自己認識，仲間との役割関係に変化のみられた 50 代の２名の女性の語りに焦点をあて，彼女らのライフストーリーを生涯発達的観点から読み取り，障害の自己認識

に変化をもたらした要因とその意味について考察し，中年期のアイデンティティの再体制化のプロセスを示す。

なお，中年期・老年期は，はっきりした年齢区分があるわけではないが，高橋らの示している基準にしたがい，中年期を 50 歳前後から，老年期を 65 歳前後からとする（高橋，波多野 ,1990,34,36）。

３．方法と対象

本論文では，筆者がこれまでにライフストーリー・インタビューを実施した知的障害のある人の中で，特に障害の自己認識に大きな変化がみられた 50 代の２名の女性の語りに焦点をあてたい。

A さんは，１回目のインタビューをした後，8 年後に 2 回目のインタビューを実施した人である。A さんは１回目と２回目の語りに大きな変化があった。

B さんは，１回目のインタビュー時の障害の自己認識の語りに疑問が残ったため，１年後に２回目のインタビューを実施した人である。B さんは，１回目と２回目の語りを通して，学齢期と現在の障害の認識の違いを語った人である。

ところで，田垣（2007,96-7）は，障害者のライフストーリー研究の課題の中で，語り直しの必要性について言及し，「ストーリーの更新に伴って『理解し続ける』必要がある」と述べている。また小林(2005,218)も「新しいアイデンティティを得ることで異なるライフストーリーが語られるようになった」例をあげ，ライフストーリーは「ある状況のもとで自分自身についての解釈が新しいテーマによって再構築できるということ」だと述べている。生涯発達的観点からみてもライフストーリーは変化する可能性をもっており，同一人物に期間をおいて複数回のインタビューを行うことの意義はあると思われる。

インタビュー時には，小さい時の出来事，学齢期の出来事，学校教育を終了してからの出来事，福祉サービスを利用したきっかけ，利用してから現在までの生活の内容や満足度，将来の夢について，自由に話してもらった。さらに障害の自己認識についても尋ねた。

了解を得た人のインタビューは録音し逐語録に起こし，得られなかった人は，メモをとりながら話を聞き直後に記録に残した。

倫理的配慮として，対象者には，インタビューは研究目的であることを事前に施設の職員を通じて本人に知らせ，施設名，名前を明らかにしないことを約束している。本発表に際し，再び施設を通して本人に了解を得た。

４．２人のライフストーリー

（1）A さん

① A さんのライフストーリーの概要　（１回目：49 歳　　２回目：57 歳）

１回目のインタビューでは A さんのライフストーリーについてまとまった話を聞くことは

できなかった。原因については後述する。以下に記す内容の多くは，２回目のインタビューで語られたことである。

A さんは兄，姉，両親の５人家族であった。幼少期は父親の会社の寮で暮らすが，小学校４年からは一戸建ての家に住んだ。小・中学校は養護学校に通った。

中学校を卒業後，父親は高校進学を進めたが，父方祖母からは「手に職をつけた方がよい」と言われ，迷った末に，知的障害者入所授産施設に入ることになる。施設では，作業面では，その目的通りいろんなことを学んだ。A さんはその様子を「いろんなことを教えてもらいました。洗濯の仕方から干し方から。…それから手芸と洋裁と。手芸でも，スウェーデンとかクロスステッチ」と語った。特に A さんはスウェーデン刺繍などを習ったという。一方，生活面では，部屋は４人部屋で狭くてプライバシーもなく，ひどいいじめにもあった。A さんはその様子を「８年間おったけど，いろんなことがあった。いびきがうるさいいうて，夜中にたたき起こされて，２人，ボカンボカンやられた。…風邪ひいてても，私だけおやつ持って（寒い）娯楽室いけって言われた…私ばっかり仲間外れする」と語った。そのような生活にたえられず，父方祖母に「そんなに嫌なら○○（県名）に帰ってこい」と言われて，８年後父方の故郷に帰った。

帰省後は，父方祖母，母親，姉と４人で暮らす。父はすでに死去，その後，祖母も死去した。帰ってから 10 年間はその家で暮らしながら，地域の知的障害者通所施設に通う。その後，母親の体調が悪くなったため，本人の希望でグループホームへ移る。そのころは「ここ帰ってきても，みんな，いいんなあ思った」「楽しかった」という。しかし最初に入ったグループホームは夜間世話人がいなくて寂しかったため，自ら希望して夜も世話人のいる２つ目のグループホームへ移った。その当初は「楽しかった」という。

②１回目のインタビュー：49 歳

私が１回目のインタビューで出会ったのは，２つ目のグループホームへ移って 10 数年たった時であった。移った当初は楽しかったグループホームであったが，A さんは様々なことに不安や不満をもっていた。加齢と共にできなくなっていく自分への不安，自分の担当の世話人への不満，介護度の高い利用者ばかりに手を掛ける世話人たちへの不満，その結果構ってもらえないことへの不満，グループホームでの孤立感などである。そのため現在についての話が中心になり，ライフストーリーについてまとまった話を聞くことはできなかった。

（以下に A さん，B さんの語りを示す。「」は A さん，B さんの語りであり，() は筆者の質問などである。また［］は，A さん，B さんの語りを分かり易くするために補足した内容である）

［加齢と共にできなくなっていく自分への不安］

「前できることができんようなるけんね，だんだん。年いくから。私，不安になるんよ。…今，耳少し，40 代よりは聞きづらい。…何したって，前，30，40 で…できたことが，年重ねるに対して，…できなくなるし」

「私…ほんとはずーっと…ホームに…働けるまで『○○』で働きたいけど，だけど不安が

あるんよね。だんだんこれから，できることができんようになるし…こないだ…母ちゃん入院，３カ月も会えなかった。…将来に向けては，やっぱり不安がある」
「今イライラしたりしよるの，更年期ってあるんよね。…でも，私，更年期ってどう過ごせばいいかいうの，今すっごい不安なんよ」

[自分の担当の世話人への不満]

「健常者はああしたらいい，こうしたらいいって言うけど…アドバイスしてくれるも分かるよ。だけど…きつく言われたら，余計に‥できん…私，素直に受け入れることできん…私，いつ…世話人さん傷つけるかもしれないよ。…今，毎日ストレスたまってイライラしとるけ。このままやったら私，おりたくない。…だけど，○○さんばっかり関わってるし，私，今，すごいさみしいんだもん［泣き出す］…［でも］グループホームにおらにゃいけんから。家はね，盆と正月しか帰られんの。今，お母さん具合悪いから…そりゃあ家に…おるとき，10年間よりは［グループホームの方が］楽しいよ」

[介護度の高い利用者ばかりに手を掛ける世話人たちへの不満]

「だけど，○○さんばっかり関わってるし，私，今，すごいさみしいんだもん［泣き出す］。でも…世話人さん…そんな分け隔てしてないって言うけど，私にとっては…ホームで安心できるいう自信が欲しいけど…そんなふうにしてないって言うけど，私，ホーム帰ってきて，ホームおっても…ちっとも楽しくないもん」

[構ってもらえないことへの不満]

「せめて５分，５分とか，毎日じゃなくってもいい。たまにはさ，話を聞いてくれたり，そばにおって，何も言わなくってもいいから…せめて何かがあったときぐらいは聞いてほしいな」
「さみしい面はいっぱいある。１人じゃから。さみしいの［泣き出す］。もっと，もっと，もっと…話を聞いてもらいたい…私，さみしいけ。ホーム帰ってきてもあれ，世話人さん忙しいからあれだけど，私，余計さみしいの」

[グループホームでの孤立感]

「『ただいま』言うたら，『お風呂入れ，入れ』言われるん，一番つらいんじゃもん［泣き出す］。…友達が言うの。…○○ちゃんが，『風呂入れ，入れ，入れ』言うけ。…言われたらつらいもん。…一息つきたいの。…今，娯楽室のチャンネル権，全部○○ちゃんが握ってるし，グループ室におられん」
「ホームでは遊ぶ友だちいないから，少しさみしい…ホームでは…私が一番上じゃから，少しさみしい…さみしい面はいっぱいある。一人じゃから，さみしいの［泣き出す］」

このように話の殆どが現在の不安，不満になっていた。岡本（2002,61）は，中年期の心理的変化の特徴の否定的変化に，生産性における限界感の認識と老いと死への不安をあげている。A さんの［加齢と共にできなくなっていく自分への不安］からはそれらの否定的変化を読みとることができる。また，他の利用者との関係では，自分が一番年上であるため話し合えず，孤立感を高めていることが伺われた。

この１回目のインタビューで，話が他の利用者の話題になった時，A さんは同じ授産施設に通う他の利用者を以下のように語っている。

［他の利用者について］

○○さんがそういう自閉症と精薄と。二重障害って知ってますか？　今，○○さんがそれなんよ。精薄と自閉症と。ダウン症の子も自閉症とか，精薄とかいうのあるでしょう。これ，言っちゃあいけん。知ってても言っちゃあいけないけん。…「○○」いう番組が教育テレビであるんじゃけど，…金曜日の晩は‥障害者と健常者のあれ，見てる。「みんなの手話」とか，手話は自分の名前だけは言えるんですよ。○○ちゃんは難聴じゃけど……何でもできるよ」

このように，「精薄」「自閉症」「二重障害」「ダウン症」「難聴」「障害者」「健常者」などさまざまな診断名が聞かれた。つまり，A さんは知的障害というものについて一定の理解があったと思われる。この語りの後，A さん自身の障害について尋ねた。

［障害の自己認識］

（さっき，○○さんは自閉症とか精薄とかおっしゃったけど…自分については何か障害を持ってると思いますか？それともそんなことはないと思いますか？）「うん，ある。ある」（あると思う。どんな障害があるんですか？）「足が…階段手すりなしで上がってこいって言われても，それはできないもん。…私，こうも言われた。…○○の寮［父親の会社の寮］におってね，障害者の子はね…臭いからあっち行け。病気がうつるとか，障害者は…生きてても…バカじゃから，…チビだから…何もできんだろうから…障害者は人間のくずだからって，私，言われたことあるけど，そんなことないと思う」（そんなことないと思う）「うん…私はおばあちゃんに…ずっと言われた。A は障害を持って生まれてきたけど A はバカじゃないんだって。…A もあれんとこいっぱいあるけど，それはあれやけど，徐々にしてればいいけど，なるべくなら…助けてもろうて，『仲良うせないけんで』っておばあちゃんには言われたけど…合うと合わん人いるじゃん。水と油みたいに…」［と再び気のあわない世話人の話になる］

このように A さんは自分には障害が「ある」といい，その障害の中身として「足」という身体障害の部分を挙げている。知的障害の自己認識については，A さんは，父の会社の寮で周りの人から「バカ」と言われたことや祖母から「障害」を持って生まれたが「バカ」ではな

いと言われたことを語るが，どのように認識しているかは，必ずしも明確には発言していない。ある程度，認識していたように思えるが，少なくとも曖昧であった。またこの他にも障害者といわれた屈辱的な体験がいくつか語られた。

③２回目のインタビュー：57 歳

その８年後，A さんに２回目のインタビューをする機会を得た。８年の間に歩行はさらに困難になり，母親も亡くなり，状況としては厳しいものになっていた。しかし今回は，グループホームの支援にも満足し，落ち着いて生活していた。グループホーム生活も 20 年を超え，グループホームの仲間からも信頼されるようになっていた。その時の生活の様子を A さんは次のように語った。

[現在の生活の様子：世話人との関係]

「ホームは楽しいですよ」（楽しいですか。よかったです。…前に聞いた時は，ちょっと嫌な職員の人いるって言ってらしたけど）「今は変わりました。…［世話人や職員は］私らのことを子どものように，家族のように，たまには叱られたり注意されたり…親代わりって私はいつも思ってる…責任持って預かってるから。…［グループホームに入ったのは］平成〇年じゃから，もう…」（21 年だね）「もう甘いも酸いもみんな知ってます…だからもう相談乗ってくる［してくる］全く。けんかが始まったらどっちが悪いのん言って仲立て入ってくれって言うけ［にっこり笑う］」

[現在の生活の様子：グッピーとの関係]

「今[グループホームの]外の下駄箱の上には，生き物がいます。…なんだと思いますか。」（なんでしょう？）「…めだかの中のグッピー。…私が［に］一番なついてるみたい。悲しい時はもうほとんどグッピーと遊んでますから。…『ただいま』言うたらもう私の小指がえさだと思って，みんな寄ってくる…今日親になる，お腹の大きいメス２頭ぐらい見て，もう楽しみなんだけど」

１回目のインタビューでは，年老いていく自分への不安や，世話人や職員に対して「きつく言われたら，余計に‥できん」「〇〇さんばっかり」「話を聞いてもらいたい」と生活での不安，不満だけが繰り返し語られた。しかし，２回目のインタビューでは一転して，「家族のように」「親代わり」「責任もって預かってる」と世話人や職員を信頼し，頼りにしていることが語られた。また他の利用者に対しても以前は「ホームでは遊ぶ友だちいない」「私が一番上じゃから，少しさみしい」と泣き出す場面があったが，今回は，一転して他の利用者が「相談乗ってくる［してくる］」と頼りにされていることに喜びをみいだしていた。そのような変化の陰には「甘いも酸いもみんな知ってます」と本人が語るようにいろいろな気持ちをくぐってきたことが伺われた。その陰にはさまざまな時期の A さんを支え続けた職員の力もあるのだろうが，それだけではないと思われる。

田中（2007,194）は，発達障害のある人の自己を育てるために必要なこととして「他者から何かをされる存在ではなく，他者の為に何かをする存在として，その場に位置づいている…そのような体験が，自己肯定感を生み出す源になっていくと考えられる」と述べている。また柏木（2013,55-6）は，人間は加齢にともなって感情が成熟し，寛容性を獲得すると以下のように述べている。

> 自分の人生を回想する語りのなかで現れる感情体験を…肯定的感情と…否定的感情に分けてみますと，加齢とともに否定的感情の語りは少なくなり，肯定的感情について多く語るようになっていきます。…高齢者は自分史を語るインタビューの中で，異口同音に「五十歳を過ぎた頃から人の気持ちがわかるようになり，自分の怒りや恨みなどの否定的感情を制御できるようになった」と述べています。…ネガティブなこと・些細なことへのこだわりを捨てる，そしてポジティブなものに眼を向ける，そうすることで他者を傷つけず自分も心安らかでいられることを知っての，能動的な情緒選択です。

A さんの語りには，田中の言う自己肯定感，柏木のいう寛容性の獲得がみられた。また自分から話し出したグッピーの話では，悲しい時の相手として世話人・職員にばかりケアを求めるのではなく,「グッピーと遊ぶ」という方法を見いだしていた。さらにグッピーが親になっていく過程をとても楽しみにしている姿が印象的であった。

また寛容性の獲得は，若い頃入所していた施設についての語りにもみられた。1 回目は否定的な内容の語りばかりだったが，2 回目の時は，楽しかったことも，以下のように語られた。

> 「10 畳に 4 人で…２畳半ぐらいのスペースしかないんじゃもん。押入れとかなんか。もうプライベートもなんもないよ…盗ってないのに盗ったって言う…でも誕生日の時嬉しかった。…○○先生がね，クリスマスの時に『A ちゃんちょっとおいで』って言うけ，何かな思ったら，『遅れて誕生日，これプレゼント』って。すっごい嬉しかった」
> 「私はスウェーデンしてました。」（…スウェーデン刺しゅうってこと？）「じゃけど，１つだけ楽しみがある」（どんなこと？）「高校野球の時は，春と夏はちっちゃなラジオで，１人が持ってくれば聞ける。…うん。ボリュームを少し落として，みんな楽しく。すごい楽しかった」

さらに障害の自己認識については以下のように語った。

[障害の自己認識]

> （A さんは，自分は…障害を持ってると思いますか？…）「障害って思ってることは…ない」（障害はないと思う）「ない。…うん。普通だと思う」（普通だと思う。…周りは障害を持ってる人はいないですか）「いますよ…［作業所からグループ］ホームに帰ったらたくさん」（…どんな人が障害を持った人だと思います？）「それは障害者ってい

うけど，それ普通だと。障害って乗り越えた人が，乗り越えるまでが大変だけど，みんな頑張ってるんだもん。…障害ってね，乗り越えられる人が普通じゃないかな…」（Aさんは障害は昔はあったけど，今は乗り越えた？）「うん。１つだけね。…いくつかの輪ができたらいいな。地域の輪…小さいかもしれないけど，まず家族が輪をつくってたくさんいけば，友達ができる，学校に入ったら友達ができる，近所にも友達ができる。一歩一歩小さな輪があって，大きな輪になる」（…そうすると，障害っていうのはなくなっていくっていうことかな？）「悪い人ら入られんもん…お巡りさんいらんもん。…小さい子は小さい子で，助けて［と言って］きたら助け合える地域になってほしい。それが私の希望なの」（そうね。そしたら障害を持った人も，普通に助けられたり助けたり）「うん」（そういう地域になってほしい？）「私の夢でもあるし，未来でもあるし，希望でもある」

１回目と比べて２回目は知的障害の自己認識にも大きな変化がみられた。１回目の時は，他の利用者については「自閉症」「精薄」「ダウン症」「難聴」などさまざまな障害名で描写し，自分については身体障害については認識し，知的障害については曖昧ではあるがある程度認識している語りであった。しかし２回目になると，自分の障害について「ない。…うん。普通だと思う」と明言している。また自分の周りの人についても，「障害者っていうけど，それ普通だ」と語った。その理由として「障害ってね，乗り越えられる人が普通じゃないかな」といい，自分についても（今は乗り越えた？）「うん」と語り，障害を乗り越えたと認識していた。それは，以前Aさんが職員に関わってほしいと求めるばかりの存在だったころから，「甘いも酸いも」も知って，その中で懸命に毎日を過ごしていく中で徐々に「みんなから頼られる」存在へと変化した自分への自信，自己肯定感の現れではないだろうか。そして「乗り越えた」自分は特別に偉い存在ではなく，「障害ってね，乗り越えられる人が普通」と語り，仲間も自分と同様に「頑張っている」ので，障害を乗り越えられる存在として認識している。

さらに，家族，友だち，地域が，小さい輪からをだんだん大きな輪を作り，「悪い人ら入られん…小さい子は小さい子で，助けて［と言って］きたら助け合える地域」を作り上げたいという夢を語っている。それは自分も他者も含めた，また障害のある人もない人も巻き込んだ普遍的な理想の世界観を描いている。

Aさんは，この８年間で，生活の中で何か大きな変化があったわけではなく，同じグループホーム，同じ作業所での生活をしている。むしろ，発達的には年齢のためもあり歩行が困難になり，母親を亡くすという喪失体験をしている。しかし60歳を前にしてAさんは「ケアラーに不満をいう人」から「ケアラーに感謝する人」へ，「ケアされるだけ人」から「仲間をケアする人」へ，と自分の役割を変化させ，自己肯定感を育む中で，障害の自己認識も「障害のある自分」から，「障害を乗り越えた自分」へと変化していたと思われる。

（２）Ｂさん

①Ｂさんのライフストーリー概要　（１回目：58歳　　２回目：59歳）

Bさんは，乳児院にいたことは覚えているが，そこでの具体的な記憶はなく，記憶にあるのは，都内にある知的障害児施設のころからである。Bさんは施設から地域の小学校の特殊学級に通った。そのころのBさんの思い出は，「お父さんみたいな」園長との温かい話であった。Bさんはその頃について「いつもね。○○ちゃんと［小学校から］帰ってきたら，そこに，橋わたったところに文房具やさんがあって，園長先生が迎えに来てくれてて，それで学園に帰るまでにアイスクリームを必ず買ってくれた。週に3回ぐらいかな。園長先生はいろんなおもちゃとかも買ってくれて，お父さんみたいだった。『内緒にしときなっていって。職員や他の人には』いつもそこで待っていてくれた」と語った。

中学を卒業すると，Bさんは地域の電気部品の工場で働きはじめる。その中ではいじめもあったが，「わかってくれるおばさん」も見つけ，結局工場が移転するまで20年以上勤めている。その後，その児童施設は，児童から成人施設に転換した。そのためBさんは30歳までそこで生活した後，地域のグループホームに移っている。

現在も，Bさんはそこで生活している。また電気部品工場を退職した後は，福祉雇用制度を使って，障害者施設で清掃業務をしている。

②1回目のインタビュー：58歳

1回目のインタビューでは，話の端々からBさんは自分の知的障害を認識しているのではないかという語りが聞かれた。ひとつは小学校のころの次のような語りである。

［小学校の思い出］

「小学校は○○小学校の特殊学級。もう一人の子と一緒にいってた。○○ちゃん。仲がよかった。学校行ってた時楽しかった。先生が2人とも厳しかった…でも人気があった。…プール教えてくれたりね。最初はこわかったけど，泳げるようになってうれしかった。…クリスマスパーティ…の行事の時は○○先生のおうちでパーティ。…よく遊んだ。…きちんとしないと怒る。でも学園からきてるから［という理由で］差別されるとかなかった。好きだった」（差別をする友達とかいたのかしら？）「生徒たちは［も］差別しなかった。よく学園にも遊びにきた。［学園の］祭りやバザーにも来てくれた」（普通学級の友達はどうだった？）「普通学級［の子］とは話す余裕はなかった」

またもうひとつは電気部品工場でいじめにあう場面での語りである。

［一般就労の頃の語り］

「［職場では］ばかにされた。かげでこそこそこそこそ。社長と工場長が，仕事ができれば健常者も障害者も関係ない。仕事してくれればそれでいいといってくれた。［おばさんたちは］差別していた。社長や工場長におばさんたちは叱られていた。でもわかってくれるおばさんもいたよ。施設からかよっていっても障害者にみえないよと言われた。…」（わかってくれるおばさんってどんな人たちでしたか？）「…そんなの関係な

いよ。文句を気にしないでとカバーしてくれた。［そのおばさんは］学園の…近く［に住んでいる人］で［私が施設から］通っているのを知っている人，おばさんはえらいねといってくれた。20 年か 21 年ぐらい働いた」

このような語りの内容から筆者は B さんは自分の知的障害を認識しているのだろうと考えながら，インタビューを進めた。しかし最後の障害の認識の質問には，意外な答えが返ってきた。

［障害の自己認識］

（自分は障害者だと思いますか？）「わかんない」（B さんにとって障害者とはどんな人？）「う～ん例えば，○○園［職場］にいる車椅子に乗っている人かな」

このように筆者にとって違和感の残るインタビューであった。そのため，この点について B さんを紹介してくれた職員に質問をしてみた。そうすると以下のような説明があった。B さんは現在，半分は正職員，半分は障害者雇用という形で雇用されている。現在，本体施設から利用者が交代で来て，その指導もまかされる立場にいる。職場の職員から，実習にきている利用者を指導するように言われており，そのことが日常のストレスになっている。一方，グループホームでは自分は利用者である。自分はいったい何なのだろうか，という相談をつい先日受けたばかりである。なので「わかんない」という言葉は，そのことからきているのではないかということであった。

そこで，障害の自己認識についてさらに尋ねるために，B さんにもう一度インタビューをお願いし，１年後に話を聞くことができた。

③２回目のインタビュー：59 歳

［過去の障害の自己認識］

（前に…B さんは自分は障害があると思われますかって聞いたとき，わからないっておっしゃったんですね。…で，ちっちゃいとき…の自分を思い出して，…障害を持っていたと思いますか？）「やっぱり，うん。普通学級の感じはしなかったね。自分では」（…どんな障害だと B さんは思ってらっしゃいます？）「勉強が嫌いだから…計算とか，ああいうのが嫌いだったし。だから，通信簿なんかオール１でした。…できなくて，できなくて。よく○○先生とか…怒られ…まして」

［現在の障害の自己認識］

（今現在はどう思われていますか？）「やっぱり，なんていうの。…人から見てもらうとどうかなと感じるんだけど。…やっぱりちょっと違うところがあるんじゃないかなという感じはしているね。やっぱり健常者のあれを見ていると。でもよその人から見たら，

どう思うのか分からない。…もしかしたら健常者に見られているかもしれないし。…でも，私…４度なんですよ。…一緒に仕事している職員の方でも…いっこずつ言えば分かることなんだけど，全部言っちゃうと分からないことが出てくるわけ。やっぱり仕事でも，人間だから失敗することがありますよね。…私もやっぱり失敗して，よく職員の方に聞くんですよ」

［障害者にみえない自己］

「［今の職場の］職員さん［に］は，『見ている限りでは，しっかりしているから，［B さんは］障害には見えないんだけどね』って言われたことがあったのね。…○○園［職場］で『きょうから新しく入りました○○ですけれど』［とある人に言われて］私が…『職員さんか』って言ったら，『いや，違います…利用者さんなんです』って言われて，それであっちも私のこと，職員だと思ったんだって。反対に。…私の場合は…最初職員さんで働くんだよなんて言われたときに，ちょっと『ええ！』と思って，…やっぱり職員で働くとなると色んな会議とか，色んなことがあって，ああいうのに出なきゃいけないでしょ。ああいうのが，私が出ても，話していても難しくて分からない」

［障害者をばかにする気のあわない職員］

「話，変わりますけど…前にいた…職員の方。…健常者の人。その人と働いていたんだけど…その人とケンカばっかりしていたんですよね。」（どんな人だった？…）「自分が仕事をしないで…○○さんなんかは［に］…遅くまでやらせて…言い方にしてもすごいきついのよ。…職員として入ったんだけど…色んなことが起きて，向こうの方が私たちのことをばかにするわけよ。やっぱり自分は健常者だから。あんたたちの荷物の中身を調べたいとかさ…警察みたいにさ…何が入っているか見せてとかさ。こんな入れ方しちゃ駄目でしょとかさ。…腹が立って，腹が立って。…その人，毎日来ていたから…仕事もやりにくくて。○○さんなんかも，特に１カ月以上休みましたよ。その人のおかげで…私たちも困って，結局○○さん［職員］に電話して『どうしたらいい？』って聞いて」（…やめてもらえたん？…）「うん」

［再び，現在の障害の自己認識］

（知的障害って何かってずっと考えているんですけれども）「知的障害ってどういう意味なんですか？例えば？」（例えば字が読めないとか，話せないとか…難しい言葉が分からないっていうことなんですけど。どう思われますか，B さんは？自分は例えば知的障害ですかって聞かれたら？）「なんて答えていいか分からない」（分かんない…しゃべれるしね。…でも，障害って本当，何なのかな…）

２回目のインタビューでさらに質問してみると，小さい頃は，「普通学級の感じはしなかった」「勉強が嫌いだから」「通信簿なんかオール１」だと語り，地域の特殊学級に通い，普通

学級の同級生との比較や成績から，知的障害を認識していたと思われる。現在も「やっぱりちょっと違うところがあるんじゃないかなという感じはしている」とのことであった。しかし最後に再び問うと「なんて答えていいか分からない」という答えが返ってきた。

Bさんの語りを振り返ると，地域の小学校の特殊学級に通うころ，自分は知的障害があるという認識を形成していたと思われる。その後，一般就労していたころは，周囲の人と自分の枠組みは「自分（障害者）」対「他の労働者（健常者）」であった。その「他の労働者」の中に「陰口をいう人」（障害者を差別する健常者）もいたり「わかってくれるおばちゃん」（障害者に理解のある健常者）もいた。それはBさんにとって，小さい時から経験してきた「障害者」対「健常者」という理解しやすい枠組みであった。

しかし成長するにつれ，日常生活の中で，度々「障害者にみえない」と言われたこと，さらに福祉就労した後は，雇用条件も「半分は正職員，半分は障害者雇用」という形の雇用であり，仕事には同じ障害をもつ「仲間を指導する」という内容が盛り込まれていた。ここで「障害のある人は指導される」「健常者である職員は指導をする」というBさんの枠組みに混乱が生じている。さらにその後に出会った「利用者を差別し，職場を混乱させる健常者の職員」の存在に怒りと戸惑いを感じている。この時期になって，健常者であるその職員よりも障害者である自分の方がうまく仲間を理解し，指導することができるという新しい認識が形成されていったと思われる。

柏木（2013,35-7）は知能を考える場合に，従来の知能検査で測れない，実践的知能に注目している。加齢とともに，知能検査で測るような知力は衰退するが，職業体験や社会生活の中で身につけたり発揮したりできるのが実践的知能なのである。また岡本（2002,61）も中年期の心理的変化の特徴の肯定的変化の中に，自己確立感の増大をあげ，そのなかで「私に対する会社での評価はベテランということになってきた」という例をあげていることとも重なる。

この実践的知能においてBさんは確実に自信を積み重ねている。その結果，Bさんの「障害者／健常者」という境界は，ますますあいまいになってきたのではないだろうか。「なんて答えていいか分からない」という答えは迷いのようにもとれるが，反面，いままでBさんの中にあった「健常者」という権威が揺らぎ，自分は障害者なのだろうか，障害者って何なのであろうか，健常者は障害者より優れているとはいえないのではないか，という新しい認識がBさんにもたらされていたのだと思われる。

（3）２人の語りに共通すること

岡本（2002,47,65-6）は，成人期の発達の２つの軸の中心的テーマとして，「自分は何者であるか」と，「自分は他者の役にたつのか」をあげている。特に中年期には，これまでのアイデンティティが揺らぎ，自分の生き方の見直しが行われ，軌道修正されて再び主体的に関与できる生き方を獲得するという，アイデンティティの揺らぎと再体制化のプロセスを辿るとしている。AさんBさんに共通のこととして言えるのは，Aさんは職員に構ってほしいという存在から仲間の相談相手へと，Bさんは障害者として健常者に負けずに働くという存在から，仲間の指導者へと，自分の役割の認識が変化している。「自分は他者の役にたつのか」に

関して，両者とも仲間の役にたっているという明確な認識が語られていた。

さらに「自分は何者であるのか」について，A さんは「[小学校は] 養護学校」「おばあちゃんに…ずっと言われた。A は障害を持って生まれてきた」と祖母から聞かされたと語り，B さんは「普通学級の感じはしなかったね。…勉強が嫌いだから…計算とか，ああいうのが嫌いだったし。だから，通信簿なんかオール１」だと語っており，両者とも学齢期に特別な教育を受ける中で「自分は知的障害がある」と認識していた（A さんの場合は曖昧なところがあるが，少なくとも，認識を否定してはいない）が，中年期になり，A さんは「障害を乗り越えた」，B さんは「なんて答えていいか分からない」という形で障害の認識を変化させていた。両者とも，学齢期に自己の障害をいったん認識していたが，その後社会とのかかわりのなかで，さまざまな仲間や職員とのやりとりを経るなかで，「障害者／健常者」という枠組みに揺らぎを感じ，その後次第に実感として「障害者」と「健常者」との境界が無くなっていったと思われる。その後，「障害を乗り越えた普通の人」「障害があるかどうか分からない」という新しい障害観，自己認識が獲得されたととらえることができる。

岡本（2002, 47）は，この２つの軸の関係について次のようにのべている。

> 個としてのアイデンティティと関係性にもとづくアイデンティティは，相互に影響を及ぼし合い，深い関連性をもっている。たとえば，他者の成長や自己実現への援助ができるためには，個としてのアイデンティティが達成されていることが前提である。これは，親が子どもを育てること，教師が生徒を教育すること，専門家として後進を指導し，育てることなど，さまざまな領域においていえることだろう。また，他者の成長への援助ができるためには，常に個としても成長・発達をしつづけていることが重要であろう。

２つの軸は影響し合い，深い関連性をもっているが，どちらの軸が前提になるのかについて，岡本は，上記引用部分から判断される限りにおいて，前提としては個の軸を重視しているように思われる。しかし，本論文の２名のストーリーからは，むしろ職員や仲間の間で悩み，次第にそれまでと違った自分の役割を身につけることで，自信をつけ，障害の認識にも変化がもたらされた，すなわち個としてのアイデンティティよりも，社会の中で作られる関係性にもとづくアイデンティティが前提になっていると思われる。

５．おわりに

知的障害の自己認識は，経験を積み重ねると「認識していない」状態から「認識している」状態になるという単純な一方向だけに変化するのではない。生活や仕事の中で，いろいろな立場を経験することによって，影響を受け，「障害はある」と認識した後にも，その認識が揺らぎ，その後「障害を乗り越えた」あるいは「なんて答えていいか分からない」という新しいアイデンティティに変化する場合もあることが，２名の知的障害のある人の語りから明ら

かになった。さらに知的障害のある人もない人と同様に，加齢に伴って，仕事や生活での経験によって自信を積み上げていたり，寛容性を身につけていたり，一人の人間として変化，発達していることがわかった。

今回とりあげた２名の他にも８年の期間を経て，インタビューを重ねた人たちが８名いる。その方たちの障害の自己認識には大きな変化はなかったものの，それぞれ当時とは違った生き方を模索していた人たちもみられた。これらの人たちの語りの変化についても今後分析していきたい。さらには老年期にはどのような語りになるのかはまだ手つかずの状態である。今後の課題としたい。

なお，本研究は，平成 22 年度～ 25 年度科学研究費補助金 / 基盤研究（C）/22530661「知的障害のある人の語りによる自己認識の形成過程に関する研究」によるものである。

引用文献

・柏木恵子『おとなが育つ条件』，2013，岩波新書
・小林多寿子，第４章『ライフストーリーを書く／もちいる』，桜井厚，小林多寿子編著『ライフストーリー・インタビュー』，2005，せりか書房
・小池敏秀，北島善夫「知的障害の心理学」，2001，北大路書房
・岡本祐子「アイデンティティ　生涯発達論の射程」，2002，ミネルヴァ書房
・高橋恵子，波多野誼余夫「生涯発達の心理学」，1990，岩波新書
・田垣正晋「中途肢体障害者における『障害の意味』の生涯発達的変化」，2007，ナカニシヤ出版
・田中道治，都築学，別府哲，小島道生編『発達障害のある子どもの自己を育てる』，2007，ナカニシヤ出版
・やまだようこ，第４章「生涯発達をとらえるモデル」，無藤隆，やまだようこ編集責任　講座生涯発達心理学Ⅰ『生涯発達心理学とは何か』，1995，金子書房

Changes in the Self-Awareness of Middle-aged Women Concerning their Intellectual Impairments

- From a lifespan development perspective -

SUGITA Yasuko

From a lifespan development perspective, men and women in their middle years usually experience a wavering of their psychological identities. Before they can re-establish their identities, they must confront the difficult questions of “Who am I?” and “Am I of any use to others?” This paper traces the life stories of two women with intellectual impairments whose self-awareness of those impairments had been fully or partially inculcated in their school years. As they accumulated a sense of usefulness as leaders or confidantes in the society of their colleagues, however, their sense of being intellectually handicapped persons began to waver until they established new identities as “a person who has overcome her impairments” or “a person who isn’t sure if she is handicapped or not.”

Keywords : Lifespan development, Middle age, Intellectual impairments,
Self-awareness of intellectual impairment, Re-establishment of identity